

おんたけさん  
「御嶽山のこと」

(215) K/T

平成 26 年 9 月 27 日（土）お昼時、木曾の御嶽山が爆発し多数の犠牲者が出た。その丁度 15 日前、9 月 12 日（土）の正午、私と妻の 2 人は同じ快晴の山頂、溶岩のゴロ岩帯の上で他の多くの登山者と共に、お昼のオニギリを頬張っていた。

また、翌 13 日（日）も快晴、9 時 45 分、“老若男女”で賑わう田の原登山口に私達は立っていた。そしてその賑わい人達の多くは、多分、お昼時を目指して頂上へ登り、昨日の人達と同じようにあの荒漠とした風景のてっぺんで、言いようもない達成感と幸福感に浸っていたことであろう、あるいは 1 人で、あるいは親しい人達と一緒に。

しかし 9 月 27 日のお昼時、あの 12 日、13 日と同じように頂上やその附近に集い、憩う人達を、一瞬の噴気と降灰、礫弾が襲い、押し潰し、押し包んでしまった。ああ、なんたることか、年老いて乾いた私の胸にも、2 週間を挟んでの、この前後のことが重なり合って、吾がことのように悲痛の涙に押し潰れそうになるのであった。

そもそも私達は、木曾の御嶽山へは過去 2 回登っていた。1 回目は平成 9 年 6 月 29 日、某登山ツアーに参加してだった。前々日恵那山、前日は岩山の南木曾岳に登っての 3 日目だった。その日はあいにくの強風とガスの中、田の原口からの往復だったが、何かやたらと神像やら石碑のようなものが林立し、どこをどう歩いているかわからず終いだった。

そこで、この天下の名峰を、良い条件での完璧な姿で確かめて見たいと思い、翌年の平成 10 年 7 月 26 日、妻と 2 人で出掛けたのが 2 回目だった。どうせなら完全縦走をしたいものだと、JR で木曾福島駅へ、そこからバスで王滝コース登山口の田の原へ入った。

前の年、ガスで何も見えなかった山頂へのルートがきっぱりと見通せた。先ず田の原天然公園遊歩道でウォーミングアップした後、去年歩いたはずの登山道へ戻った。前後左右全て見渡せる王滝ルートを、右や左にと神霊像や神霊碑に見守られながら岩石だらけの道を登り、王滝頂上山荘に着いた。山荘は薄べりを敷いた広い部屋になっていて、いかにも、修験者達のための宿坊という風だった。

翌 27 日は山頂に上り御岳神社奥社を参拝した後、二ノ池、三ノ池を通過しながら、溶岩や



平成 26 年 9 月 27 日（土）  
木曾の御嶽山が爆発 WEB より



平成 26 年 9 月 12 日（土）  
の正午、私と妻の 2 人は  
同じ快晴の山頂で



翌 13 日  
田の原口から山頂望む

砂礫の起伏する広大な山頂風景を脳裏に刻んだ。五ノ池を下方に見る飛騨頂上 2,800m が下降点となり飛騨小坂口コースを濁河温泉へ下る、長かった。温泉に浸からなかったことを心残りにしながらバスとJR を乗り継ぎで、木曾福島経由で帰宅、1泊2日の、御嶽山縦走の、妻と2人の個人山行だった。

このように、御嶽山については、この2回の経験で思い残すことはなかったが、平成26年7月末、L山岳会で担当した木曾駒ヶ岳のTL山行で「素晴しかった」と満足いただいた（と自分では受けとめた）ことに“調子に乗った”か、“御嶽山の頂上で泊まれば新津ハイキングクラブの皆さんに、あの素晴らしい情景を、（2回目、3回目の人にも、夢をもう一度で）味わってもらえよう、そのためには先ずは下見だ”と思い立った。

2回の経験のある王滝コースを上り、山頂で宿泊、ロープウェイのある黒沢コースを下る、ミニ縦走を想定し、そのための黒沢コースの往復をするべく、平成26年9月11日（金）マイカーを走らせた。

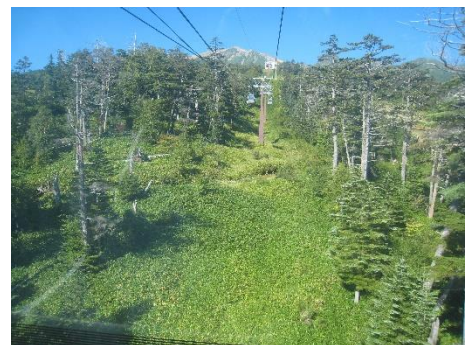
早朝5時40分出発、塩尻ICから国道19号経由で御嶽ロープウェイの乗場、鹿の瀬駅に着いた。途中、朝食休憩や、御嶽山麓での少々の道迷いロスもあって丁度12時だった。ところがそのロープウェイがなんと運休、理由は山域一帯に雷が発生し落雷も起きているということ。雷の鎮まるまでしばらくは待つことにした。駅の内側の広々とした花壇を眺めたりしながら待つこと2時間余り、ようやく運転再開の知らせ、だがもう14時を廻っている。山頂までの歩きを考えると今日は中止とし、どこかで宿を取って明日、日帰り登山にすることに決め、予約していた御嶽頂上山荘へ断わりの電話と山の状況の問い合わせをした。すると、山荘の人（若い男性のよう）も、「山頂附近は今も雷が鳴っている、今日は登って来ない方が良い。」と言ってくれた。

明日の天気回復を期待して、車を返し、途中どうも宿泊客のいる様子のない1軒の宿を横目に下り、来るとき道迷いをした分岐附近の、大型バスが数台止まっている「木曾温泉」というホテルで尋ねてみた。この辺の宿は不意の客に慣れている感じで、すんなりと決まった。

翌朝、朝食7:00、ホテル出発7:30で、ロープウェイ着7:43、8:25始発のゴンドラは6人乗りだがわれわれ2人だけ、歩き始めとなる飯森高原駅に8:40に着いた。ここの標高は2,150m、田の原登山口バス停は2,180mだ



鹿の瀬駅 鐘の鳴る丘



御嶽ロープウェイ



金剛童子・女人堂八合目



八合目

から、こちらが 30m 低いことになる。

駅の真向いに高山植物園（薬草園）があるが、日帰り登山なので先を急ぐ、ここは帰りのお楽しみということで先ずは歩き始める。

樹林の中 10 分ほどで 6 合目だ。中ノ湯から上ってくる道を合せ、しばらくは巨岩が重なり、深く暗い樹林の沢沿いの道を上るが、やがてひょっこりと 7 合目行場山荘に出る。山荘は固く閉じられていて人の気配はない。向いに立つ御嶽神社開基の覚明上人像に一礼し更に歩む。

道は沢筋からそれ、樹林はしだいに明るくなり、更にまばらになってくると 8 合目女人堂に着いた。ここは宿泊所にもなっていて、後片付で忙しそうな様子から、昨日の雷と、(多分) 雨でだいぶ宿泊があったのではなかろうか。周囲には、かって王滝コースで目にしたような霊神像や霊神碑が林立していた。

実はここでカメラをベンチに置き忘れ、しばらく歩いてから気付いて取りに戻り、上って来る男性に念のため尋ねたところ、「これでしょう」と置き忘れのカメラを掲げて見せてくれた。さすが、霊峰御嶽山を訪れる人は善人ばかりと、深々頭を下げた。

樹々は更に疎林となり、いつしか森林限界となって、眺望が一気に開ける溶岩帯へ出た。ここで一休みして山域を見渡す。正面上方には 9 合目石室や避難小屋と思われる一かたまりが見え、左方からは王滝コースの尾根が上ってきてこの黒沢コースと合さり、真っ直ぐに頂上へとせり上がっている。右手はといえば、登山ルートが斜めに右方向へ山頂稜線へと延び上っていて、多分三ノ池方向への短絡コースに違いない。このような眺望の黒沢コースは、王滝コースとはまた違った魅力あるコースだと実感した。

ゴツゴツした岩場を右手に廻り込む道をとったら計らずも今晚泊まることになった黒沢館経営の石室山荘の中を通ることとなった。(帰りは左手の道) これもなにかの因縁か、はたまた覚明上人のお導きか。石室の上方、避難小屋を覗くと、かなりの人数の登山者が休んでいた。覗くだけで先を急ぎ、覚明堂に一礼して岩道を一登りすると、道は火山灰が押し固まった砂礫帯に変わった。平坦な開けた所に黒沢十字路の標識が立つ。そこからは、9 合目下方で見渡した地形が、更に間近かとなって見て取れた。左方斜めに王滝コースへの短絡が上り、正面やや急登が真っ直ぐに伸びている先は頂上、右方緩やかに下



御嶽神社開基の覚明上人像



右方、遙か縦走路稜線望む



二ノ池を背にして、  
黒沢十字路



御嶽神社奥社の山頂広場

と、かなりの人数の登山者が休んでいた。覗くだけで先を急ぎ、覚明堂に一礼して岩道を一登りすると、道は火山灰が押し固まった砂礫帯に変わった。平坦な開けた所に黒沢十字路の標識が立つ。そこからは、9 合目下方で見渡した地形が、更に間近かとなって見て取れた。左方斜めに王滝コースへの短絡が上り、正面やや急登が真っ直ぐに伸びている先は頂上、右方緩やかに下

っていき先は二ノ池、更にその先の山頂縦走路へと続く。この情景は間違いもなく、かつて平成 10 年山頂縦走の時に見たものだと、感慨にひとしおの感で、しばし十字路に佇んでいた。

山頂へは後一息、尾根の傾斜はさほど急登というほどのことではないが、空気が少し薄くなってきたか、それまでの疲れが出てきたか、ややハアハアとなってきたが、歩幅を狭め、一步一步確かめるように登る。十字路から 30 分弱、左右に頂上の小屋を見て最後の石段を登ると、3,067m 御嶽神社奥社の鎮座する山頂広場に三たび立つことが出来た。12 時 05 分だった。



剣ヶ峰から下山

石造りの奥社右手を少し進むとゴツゴツした溶岩地になっていて、一ノ池を下方に望む断崖の一角に山頂標識が立っている。丁度土曜日のお昼時、山頂やその周辺を含め 40 人余りはいただろうか。一ノ池をじっと見降す人、かなた山頂稜線の起伏を見つめる人、おいしそうに食事する人、あちらこちらと動き廻りながめたり拝んだりする人、様々な姿があった。



この辺りから噴火

私達は食事と 360° の大展望を楽しんだ後、一ノ池を時計廻りで3分の2周して二ノ池へ下ることにした。これは初めてのコースとなる。頂上直下の巨岩重なる急下降を下ると、そこだけが土手状に盛り上がった砂礫地に出る。一ノ池の上手、南のへりだ。振り返ると今下った断崖の上は山頂、それに連なる外周は岩また岩、それらに囲まれて、水の全くない、火山灰の真っ平ら地が広がる。それが一ノ池だ。池の反対側、つまり外周ルートの南面、外側を覗き見ると、そこ

は見るも恐ろしげな様相、巨岩の塊がいくつも、切っ先鋭く突き上げ、その下方はガスだか噴気だかが立ち込め底知れず、正にオドロオドロしいとはこのような情景を言うのであろうか。

こここそ、この 2 週間後にあの爆発を起こした正にその場なのだと、その時は全く知る由もなかった。

その場はそこそこに、累々たる溶岩の岩場を先を急いだ。山頂直下から、二ノ池へ



一ノ池外周途中、山頂・剣ヶ峰方向望む

の下降点となる「36 童子の塔」までの、一ノ池の3分2周は地図上は破線で標識やペンキマーク等の標識はほとんどなく、ルートを探し確かめながらで、晴天でなければ来てはならない所だと思った。

しかし、一ノ池越しの山頂風景は素晴らしく、絶好のカメラポイントが次々に現われ、その都度立ち止まっては、二度と来ないとの思いでカメラに納めた。

36 童子の塔に着くと、無事一ノ池を周ることが出来たことでホットー息を入れる。ここからは水の全くない一ノ池の全貌と青い水の二ノ池（の一部）の双方を眺望することが出来た。

塔からのひと下りで二ノ池北岸に建つ「二ノ池本館」だ。2週間後の爆発で大勢の避難者が逃げ込んだ所となるとは、これもまた夢想だにしない。山小屋はいざとなればそのような機能を発揮する所となるんだなあ、後でつくづく思う。



36 童子の塔、バックは一ノ池と剣ヶ峰

昼前に通った黒沢十字路の平ら地の見える池畔でコーヒーを一杯、一ノ池とその上方の山頂部の盛り上りの下方には白い残雪、その手前に青い水を湛えて広がる二ノ池がまぶしい。

黒沢十字路への緩い傾斜を登り返すと後は来た道を下るだけ。縦走も良いが、往復もまた良い。登りと下りとで微妙に違う情景、また登る時に気付かなかったことでも、下りでは気持ちに余裕をもって気付いたり、発見したりする楽しさ、喜びがあった。

16:15、ロープウェイの飯森高原駅の真向い上方の高山植物園（薬草園）に着く。花の時期なら多分わかるだろうが、植物に疎い自分には残念ながら一つ一つ見分けることができなかった。



剣ヶ峰から二ノ池、賽ノ河原へ

ロープウェイ駅から車に乗り換え帰路につくが、“待てよ、ものにはついてということがある。ここまで来たらもう一泊して田の原の登山口を確かめてみよう 今はどんな様子か”と2人の話がまとまった。2人だけだと話が早い。泊る宿はとなって、さすが女は目角が強い。11日来る途中の、木曾町三岳地区内黒沢で居並ぶお宿の中で、いかにも由緒ありげな黒沢館というのを妻が覚えており、しかも黒沢コース9合目の石室山荘と同一経営で

あるという。連絡を取ると、その日の午後5時過ぎたというのにOKとなった。

宿の内湯からは御嶽山が望めたが、黒沢地区から、つまり東方向からの眺めは御嶽山の最も典型的な山容となるので大満足だった。昔、この家は、御嶽神社の神職の出である女の人が元になったというだけあって、古い、いわれのある掛軸や額などがいろいろ見られた。部屋よし、食事もよして、機会あればもう一度是非泊まってみたいと思わせる宿だった。



### 二ノ池から山頂（やや左奥）を望む

伸びている。これから登ると頂上には丁度お昼時になるだろう。それこそ老若男女の賑わいを後にして、約1時間後の8:50、私達は帰路についた。

「よし来年は、田の原口から登って山頂で一泊、黒沢口のロープウェイ駅へ降るミニ縦走をやろう。」そんなことを話合いながらマイカーを走らせていた。

ところが、平成26年9月27日（土）、正午頃御嶽山のあの爆発が起こった。そのことについては当時詳しく報じられ、今ここで繰り返すところではない。ただ私達2人は、その2週間前、多数の犠牲者が出た正にその場所に立ちっており、その情景、その賑わいのただ中にいた。新聞、テレビ等の様々な情報は手にとるようにわかるし、その悲惨さへも感情移入して心から悼む気持ちになった。

当時の論調の一つに、“火山の爆発の予知は難しい”というのがあったが、果たしてそうであろうか。9月11日の異状なまで長く続いた雷、その時の山頂附近の状況はどうだったのか。それは2週間後27日の爆発の前兆ではなかったか。専門家が継続的に情報をキャッチし、対応していれば果たしてどうだったろうか。

他の論調に“日本は火山国でありながら火山対策の予算も、研究や対策も遅れている”というものもあった。犠牲者が出てはじめて言い訳があり、対応が出てくるといふ、相も変らない構図があり、近年起こっているいくつかのことも類推が及ぶ。火山対策についてはこの御嶽山の事故をきっかけ

3日目、黒沢館出発 6:55 王滝村に入ると道の両側に神霊廟や神霊碑・塔、それに宿泊所などが次々に立ち並び、黒沢口と共に最も早くから開けた参拝基地という、歴史の重みも感じさせた。約1時間弱で田の原口に着くと、日曜日ということもあって、既に広い駐車場一杯に車がとめられていてびっくりした。

なんとか駐車スペースを見つけて登山口、標高2,180mの大鳥居をくぐり、16年前と同じように田の原天然公園を一廻わりして登山道へ戻る。上方を見ると王滝コースが頂上へ向かって真っ直ぐに



### 再び、覚明堂にて

に進められているようだが“喉元過ぎれば熱さ忘れる”にならないことを願う。そして、安心と安全で、大勢の人達が参拝や登山ができ、それを支えてくれる多くの山小屋やお宿なども賑わう、そんな日がまた巡ってくることを願っている。

それはそれとして、“御嶽山のミニ縦走”はこれで白紙となった。もうそんなことを言っている場合でない。

そう言えば、9月12日(日)私達が御嶽山山頂に着いた時、山頂小屋の、若い男性のスタッフが1人ベンチに腰を降ろしていた。私は自分を名のり、「昨日電話で予約の取消しをしたが申し訳なかった」と謝ると、その人は電話を受けた正にその人で、「きのうは上って来なくて良かったですよ。」と言ってくれた。

その心優しい、スタッフの若者は果たして無事でおられるのか、私にはいつまでも気がかりになっている。



御嶽社前にて



(おわり)